

仙台市文化財調査報告書第92集

五城中学校北窯跡

発掘調査報告書

1986年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第92集

五城中学校北窯跡

発掘調査報告書

1986年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市には古代の窯跡群が2地区あります。一つは台原・小田原地区であり、一つは西多賀地区であり、全国的にも知られた窯跡群であります。窯跡の存在は宮衙跡・寺院跡との関連が無視できませんが、仙台市及びその周辺市町村には、陸奥国分寺跡、国分尼寺跡、多賀城跡、そして郡山遺跡などの遺跡があり、窯業生品の主要な供給先となっています。これらの遺跡は古代東北地方経営の拠点であるとともに、統合のシンボルでもありました。

さて、今回調査を行ないました五城中学校北窯跡は台原・小田原地区にある窯跡の一つであります。調査箇所は窯跡が存在する傾斜地ではありませんが、窯に関係のある作業場などがあると考えられた平畠地がありました。その結果、丘陵上端縁辺部に工房跡と思われる遺構が発見され、五城中学校北窯の造瓦所としての一端が見られるようになりました。

今回の調査も多くの例にもれず、マンション建築の事前調査として行なわれました。幸い、用地の過半は保存縁地として残されますが、今後とも、開発と文化財保護の調和点を辛抱強く摸索することが必要なことと考えています。

最後になりましたが、この発掘調査並びに報告書刊行にあたり、多くの方々のご協力やご助言を賜わり、深く感謝を申し上げます。さらに、この報告書が十分活用され、多少なりとも市民文化の創造に役立つことを念じて序といたします。

昭和61年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書はマンション建設に伴う遺跡の事前調査報告書である。
2. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1:50,000「仙台」の一部である。
3. 本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973)を使用した。
4. 本書中の方位の表記は磁北に統一してある。なお、仙台では磁針方位は真北に対して西偏約7°20' (昭和57年)である。
5. 黒色処理されている土師器については、その実測図にスクリーントンを貼って表現した。
6. 出出土器の図において、中心線が一点鎖線で図示されているものは、図上復元したものである。
7. 図面中の水系レベルは海拔高を示す。
8. 本文の執筆・編集は結城慎一が担当した。
9. 調査により出土した遺物並びに記録としての写真・図面は、仙台市教育委員会で一括保管している。

調　　査　要　項

遺跡名	五城中学校北窓跡（仙台市文化財登録番号C-446）
調査場所	仙台市東照宮一丁目422、425
調査面積	約520m ² （本調査面積約210m ² ）
調査期間	試掘・昭和59年12月13、14、24日　昭和60年6月4日 本調査・昭和60年7月15～7月24日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局教育部社会教育課文化財調査係 試掘・佐藤隆、斎野裕彦 本調査・結城慎一
調査参加者	松坂浩、眞中信三、岩瀬信博
整理参加者	赤井沢進、赤井沢千代子、千葉一、小林充、西條裕子
調査協力	日本都市開発株式会社、株式会社桂設計

目 次

序文

例言

調査要項

目次

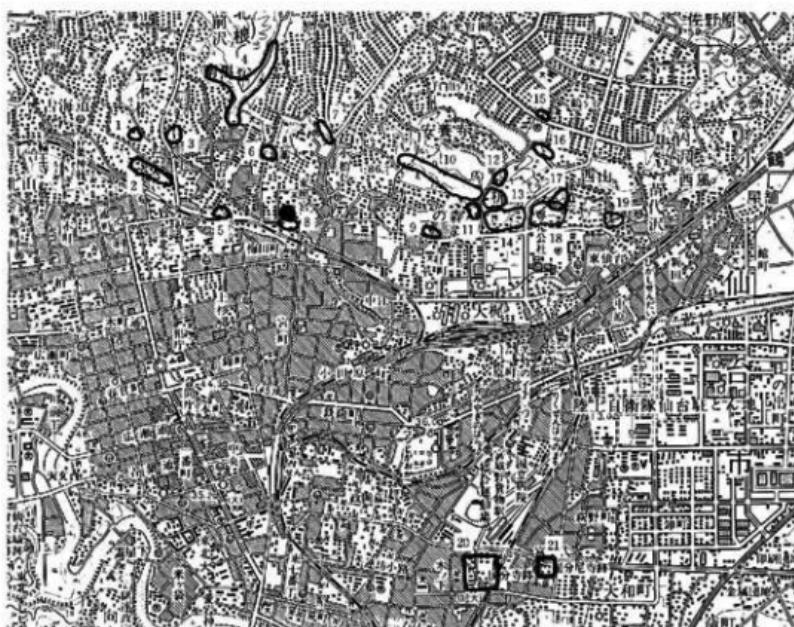
1 . 当遺跡の位置と環境	1
第1図 調査位置とその周辺	1
2 . 調査経過	2
第2図 試掘区と本調査区	3
第3図 遺構配置図	4
3 . 発見遺構	5
第4図 S I 1 穴式遺構	5
第5図 S I 2 穴式遺構	7
第6図 S I 3 穴式遺構(1)	8
第7図 S I 3 穴式遺構(2)	9
4 . 出土遺物	9
第8図 土師器実測図	10
第9図 瓦実測図	12
5 .まとめ	13
参考文献	14
写真図版	
写真1 調査区全景	15
写真2 S I 1 の状況	15
写真3 S I 2 の検出	15
写真4 S I 2 の断面	16
写真5 S I 2 を完掘	16
写真6 S I 3 遺物出土状況(1)	16
写真7 S I 3 遺物出土状況(2)	17
写真8 S I 3 遺物出土状況(3)	17
写真9 S I 3 を完掘	17
写真10 出土遺物(1)	18
写真11 出土遺物(2)	19

1. 当遺跡の位置と環境

当遺跡は仙台駅から北へ約2.5km、仙台東照宮のすぐ西側に当たり、窯跡群が点在する台原・小田原丘陵上にある（第1図）。

仙台市には青葉山段丘以下何段もの段丘地形があるが、当遺跡の存在する部分は、第四紀更新世後期の初めごろに形成されたとみられる台の原段丘である。この段丘は海拔50～100mで、5～6mの厚さの段丘疊層が堆積している。その一部は岩石が露出している岩石段丘であり、一部は砂礫層で被われている砂礫段丘である。段丘疊層は、上部から1m内外のローム質粘土層、次いで2～3mの偽層疊層からなっている。

この丘陵地帯が、瓦・須恵器などの生産地として長期間使用された条件には、良好な粘土、窯体に最適な基盤、そして水源に恵まれたことをあげることができる。



- | | | | |
|------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 堀町窯跡B地点 | 7. 南光沢窯跡 | 13. 桥江窯跡 | 19. 大蓮寺窯跡 |
| 2. 堀町窯跡 | 8. 五城中学校北窯跡 | 14. 神明社窯跡 | 20. 陸奥国分寺跡 |
| 3. 一本杉窯跡 | 9. 庚申前窯跡 | 15. 鶴ヶ谷窯跡 | 21. 陸奥国分尼寺跡 |
| 4. 五本松窯跡 | 10. 与兵衛沼窯跡 | 16. 安養寺中園窯跡 | |
| 5. 杉添東窯跡 | 11. 二の森窯跡 | 17. 安養寺下窯跡 | |
| 6. 一本松窯跡 | 12. 安養寺配水場窯跡 | 18. 前田窯跡 | |

第1図 調査位置とその周辺 (1 : 50,000)

現在、この丘陵上は、ほとんど全域が住宅地となり、一部の社寺用地等に、灌木叢、松杉を主とする喬木林が残り、わずかに原形を保っているにすぎない。また丘陵中の大小谷にあった湖沼も、かつての農業用の役割を失ない、排水池化しつつある。この丘陵西方、杉山台の原に杉山焼として起った仙台藩窯も、後に堤焼として栄えたが、明治以後衰退し、今では、やっと伝統を守っているにすぎない。

五城中学校北窯跡は、上記のような位置と環境にある。現在、窯跡は1基だけしか確認されていない。今回の建築予定に先立って行なった発掘調査箇所は、窯跡の確認されている南斜面の上で、北側にあたる平坦な面であり、窯関連の工房、住居跡等が期待される場所であった。

2. 調査経過

前述したように、窯そのものよりも、それに関連する工房、住居跡等の検出が考えられたため、59年と60年の2回・延4日で約520m²の試掘を行なった。その結果、対象区南東部に遺構の存在が認められたが、他の大部分は表土を20cm前後削ぐとすぐ黄色のローム質粘土が検出され、しかも不思議なぐらいたいピット等も発見されなかった(第2図)。以前に営林署の資料館や舍宅があった場所なので、切土して平坦面を造成したものと考えられる。

以上のような試掘結果にもとづき、7月に対象区南東部の本調査を行なった。次の調査日誌で経過を把握されたい。

• 7月15日(月) 晴れ

午前中、柳生の現場及び高砂整理室から器材運搬。午後、調査区内で遺構検出を行ない、擾乱土壤を掘り上げる。土師器、瓦片多数出土する。

• 7月16日(火) 晴れ

東から第1、第2、第3遺構とする。第1～第3遺構の精査、掘下げを行なう。(以下、第1遺構をS I 1、第2遺構をS I 2、第3遺構をS I 3と記す。)

S I 1は新しい溝2本に切られているが、方形プラン。半分以上は調査区南側に出る。

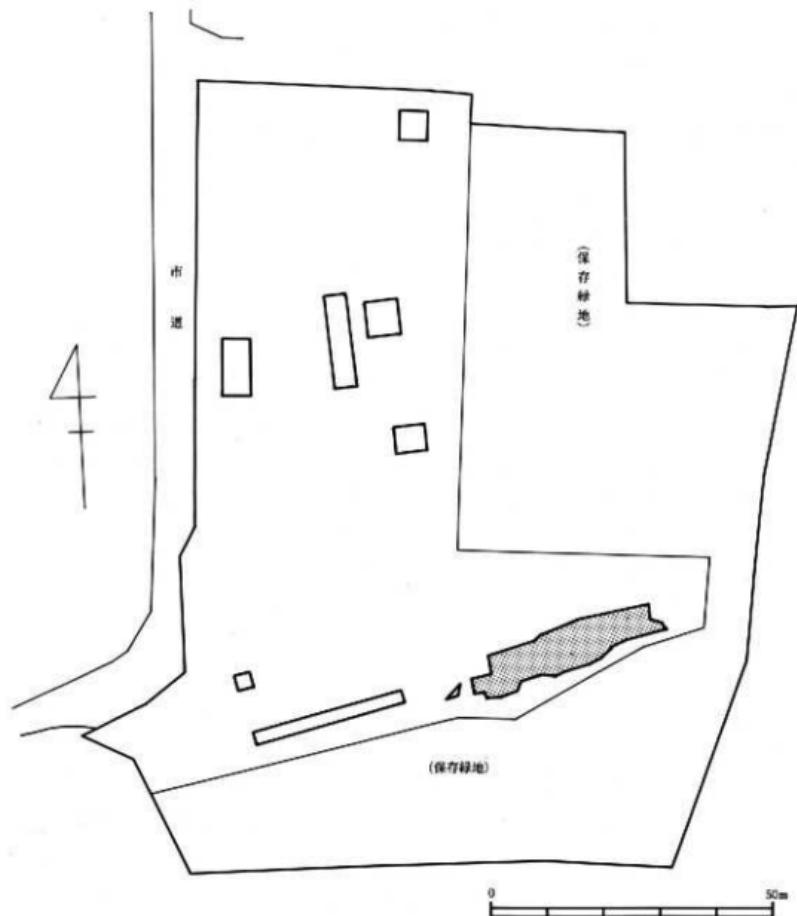
S I 2は円形プラン。確認面からは土師器、鉄津など出土したが、掘下げ中には遺物の出土なし。検出状況の写真撮影をし、20分の1の平面図をとる。

S I 3はプランがはっきりしない。瓦、土師器片を焼棄したような土壤か。

• 7月17日(水) 晴り

S I 1をほぼ掘りきる。方形竪穴で、北東コーナーに土壤あり。土壤より極片出土する。

S I 2は北半分をほぼ掘りきる。3時期使用か、それとも掘り方か、堆積土中には遺物の発見なし。



第2図 試掘区と本調査区

SII-3は小形の竪穴か。ちょうどカマド焚口にあたる部分に瓦、土師器片が集中し、その周囲に焼土あり。遺物出土状況の写真をとる。

・7月18日（木） 晴れ

SII-1の平面実測、SII-2のセクション実測・写真撮影、SII-3の遺物出土状況実測・写真撮影、セクション実測・写真撮影を行なう。

・7月22日（月） 曇り

S I 1 はセクション実測と写真撮影、S I 2 は遺構南半の掘り下げを実施する。S I 3 は、掘り下げを完了させた後、遺物出土状況の実測・写真撮影・遺物の取り上げ、セクション実測、平面実測を行なう。

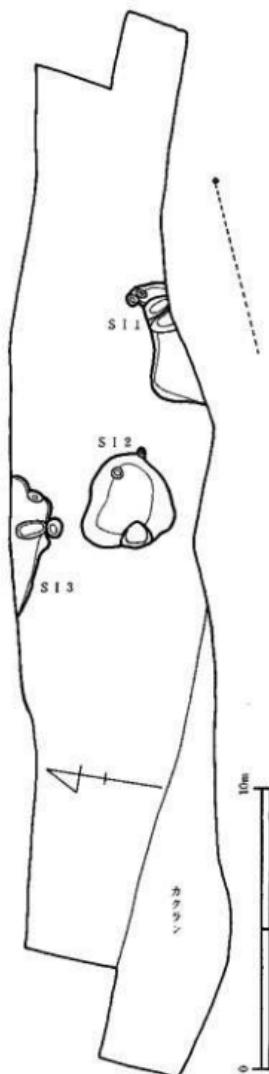
また、仮B・Mの標高を算出した。

• 7月23日（火） 晴れ

S I 2 を完掘、平面実測をする。その後、調査区全体の測量、S I 1～3 のレベル記入、S I 2 全景と調査区全景の写真撮影をする。

• 7月24日（水） 晴れ

器材、遺物の撤収作業を行なう。



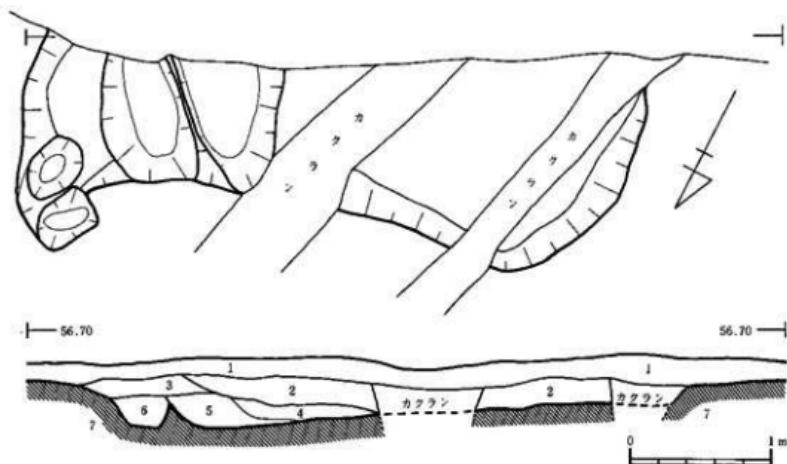
第3図 遺構配置図

3. 発見遺構

(1) 第1遺構(S I 1)

S I 1は東西が約4mで、ほぼ磁北の方位にあう。方形豊穴であるが、全体の半分以上が南側の保存緑地の方に逃げているため、南北の長さは不明である。前に営林署長官舎のあった場所であり、2本の擾乱溝が南北に切っている。豊穴の北東角にあたる部分には二つの土壠とピットがみられる。豊穴の確認面からの深さは約20cmで、土壠底面は約30cmである。豊穴内部には周溝などの排水施設は見られないが、床面が西から東へ少しづつ傾斜して土壠のところまで至っており、それが排水等の機能に結びつくものであろうか。

断面を見ると、この豊穴は東の方から土砂が埋っていたことを示している。出土遺物は全体に多く、土師器片が最も多く、次いで瓦片、鉄滓が若干である。豊穴内の各堆積層とも炭や焼土を含んでいるが、炭や焼土が層をなしているところはなく、もちろん壁や床面が直接火を受けた痕跡は、検出した範囲内では認められなかった。(第4図)



層位	土色	性状	備考
1	7.5YR 4/2 暗褐色	シルト	表土
2	7.5YR 4/2 黒褐色	シルト	しまり、やや有り。瓦、土師器片含む。炭、焼土を含む。
3	7.5YR 4/2 暗褐色	シルト	しまりなし。土師器片、炭を含む。明褐色シルトをブロック状に含む。
4	7.5YR 4/2 暗褐色	粘質シルト	しまりなし。炭を少量含む。土師器片含む。
5	7.5YR 4/2 暗褐色	シルト	しまり有り。炭を含む。土師器片含む。
6	3 YR 4/2 暗赤褐色	シルト	しまり、やや有り。土師器片及び炭を少量含む。
7	7.5YR 4/2 明褐色	粘質シルト	地山

第4図 S I 1 豊穴遺構

(2) 第2遺構(S I 2)

S I 2は東西に長軸をもつ楕円形のプランを呈する。東西が約3.5m、南北が3mである。表土を剥いだ確認面で、楕円形プランの東側に、炭、焼土面が広がっており、鉄滓、羽口片、土師器片が出土する。また、プランの北、東、南周囲には暗褐色土が認められ、竪穴の中心部に向って舟底形に堆積している。この暗褐色土には若干ではあるが土師器片等が含まれている。この遺構もS I 1同様の方向を意識した配置となっているようである。

ところで、この遺構の底面は確認面から約70cmで最深であり、壁は直立か、それに近いものではなく、舟底形を呈し、楕円形プランなので、ポールの底のような状況である。その堆積土を見ても、前述した北、東、南側周囲に見られたもの以外は、全般的に褐色系のシルト及び粘質シルトで、しまっており、確認面には炭や焼土などが貼りついているものの、各堆積土層中には炭、焼土、遺物等は含んでいない。

これから考え合せると、確認面から下の部分については、S I 2の掘り方とみられ、確認面とプラン東端にとり付くピットが使用されていた遺構そのものと把握される。

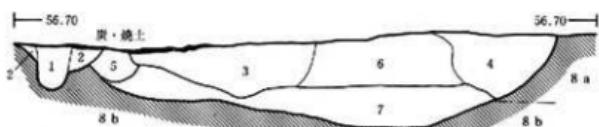
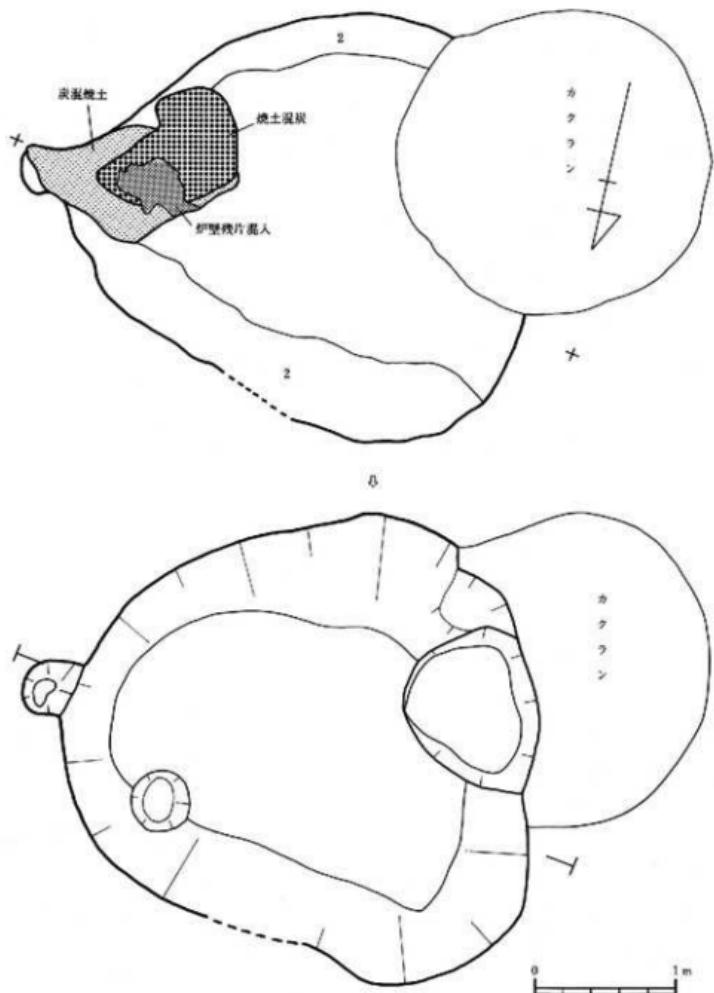
本来、この確認面が竪穴の底面をなしていたものか、また竪穴でなく平面遺構で、周囲に柱を立て、壁等を形成していたものは柱穴の検出がなく、周溝なども認められなかったので不明である。(第5図)

(3) 第3遺構(S I 3)

ほとんどが北側の調査区外に出るので全様は不明である。東西4m以上、南北1.6m以上の竪穴で、S I 1・2とはほぼ同様の方向をもつものと思われるが、前2者よりも、真北に近いようである。検出面から床面までは浅く、10cm前後である。検出時に、南東角付近外側に見られた径約60cmのピットも一体のものと考えていたが、断面等の検討により、S I 3以前のピットであることがわかった。(第6図)

上記ピットを若干切るような状態で、竪穴内に、プランがほぼ110×60cm、深さ約30cmの土壤が確認された。この土壤内からは炭、遺物等の出土はない。この土壤が埋まりきった状態で、ほぼその上に重なるように瓦、土師器が集中して見られる。瓦は立ててあるものもあり、廃棄された状況ではない。また、これらの土師器、瓦といっしょに、多量の炭と焼土も検出された。第7図断面の堆積土2と5の層間に若干の焼土、炭が見られる。

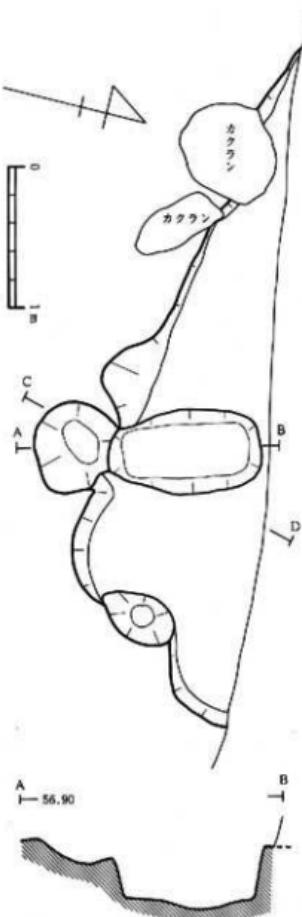
以上のことから、竪穴内に見られる土壤と、その上層にある遺物群に直接の関連は認められないものの、位置的なことも考え合せると、何か同様の機能を有していたものではないかと推定される。



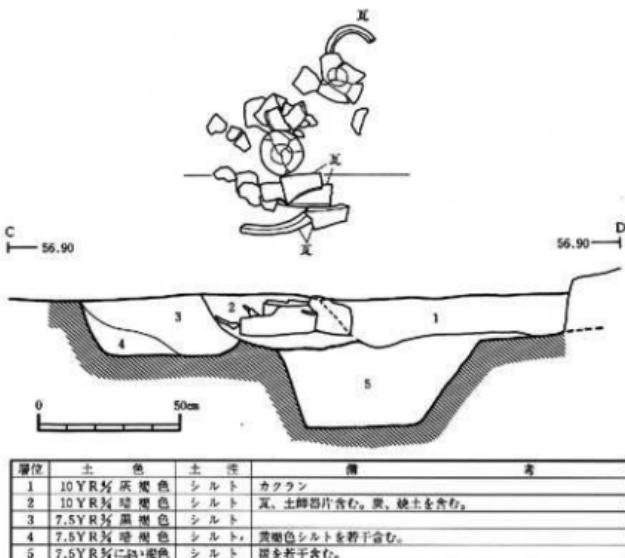
第5図 S1 2竪穴遺構

第5図 セクション註記表

部位	土色	土性	備考
1	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト	しまり有り。炭、焼土を少量含む。
2	7.5YR 4/6 暗褐色	シルト	しまり有り。炭、灰土、上部面を少量含む。
3	7.5YR 4/6 黒褐色	シルト	しまり有り。黒褐色シルトをブロック状に含む。炉壁片、炭、土師器片多量。
4	7.5YR 4/6 明褐色	粘質シルト	しまり、やや有り。暗褐色シルトを斑状に含む。
5	7.5YR 4/6 黑褐色	粘質シルト	しまり、やや有り。炭、燒土を上部に含む。
6	7.5YR 4/6 明褐色	シルト	しまり有り。
7	7.5YR 4/6 暗褐色	粘質シルト	しまり有り。黒褐色粘質シルトをブロック状に含む。
8 a	7.5YR 4/6 黑褐色	粘質シルト	しまり有り。地山。
8 b	10YR 4/6 明褐色	シルト	しまり有り。地山。



第6図 SI 3 壁穴構造(1)



第7図 SI 3 壁穴遺構(2)

4. 出土遺物

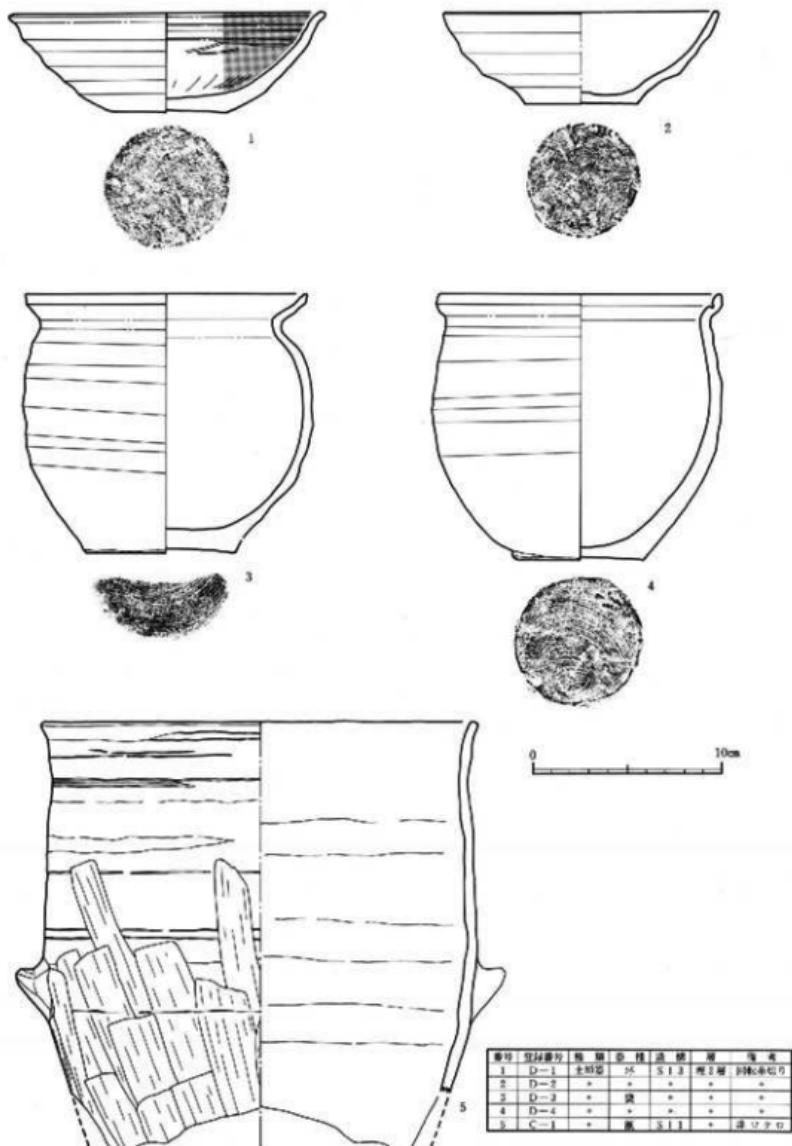
出土遺物には土師器の壺・甕・瓶、瓦、羽口片、鉄滓、その他がある。出土遺物全般の特徴は、須恵器片が數点で、全体の出土量から言えば皆無に等しい状況であり、それも甕の小片と思われるもので、形状、調整まで言及できるものはないと言うことであり、また、土師器等も小片が多く、接合後、実測可能なものが極端に少ないとある。

(土師器)

土師器には壺、甕、瓶片があり、今回出土した遺物の大半を占める。接合できた破片のうち実測可能なものは5点であり、他の多くは観察資料である。観察できる範囲では、ほとんどがロクロ使用され、壺・小形の甕については、底部切り離しが回転糸切り、長胴系の甕ないし瓶は、体部下半が手持ちヘラケズリ、底面はヘラケズリないしはヘラナデされて切り離し不明なものが多い。後者には非ロクロのものも存在する。遺構の性格と関連するのか、再斂化を受けているものも多く見られる。

壺1 (第8図1)

SI 3・埋2層出土。底部は回転糸切り未調整で、内黒である。ロクロナデされているが、



第8図 土師器実測図

番号	宝持部分	施	施	施	施	施	施
1	D-1	土師器	+	S-1	+	10cm	切刃
2	D-2	+	+	+	+	+	+
3	D-2	+	+	+	+	+	+
4	D-4	+	+	+	+	+	+
5	C-1	+	施	S-1	+	津	テロ

器面には巻き上げ痕が残っている。内面は、口縁部に横位、体部から底部にかけて縦位のヘラミガキがなされている。一部再酸化を受けて、外面が赤褐色に変色しており、その箇所に対応する内墨の部分も、色がとんでいる。

口径16.8cm・底径6.3cm・器高5.3cmであり、底径／口径は約0.38の数値になる。

壺2(第8図2)

S I 3・埋2層出土。底部は回転糸切り未調整である。ロクロナデされているようだが、器面には巻き上げ痕を残す。磨耗のため、内面にミガキがあるか不明である。外面の底面から体部上半まで、再酸化されたのか、一部を残して黒変している。現状では推定の域を脱しないが、内面も黒色処理されていたものが、再酸化によって色がとんでしまったことも考えられる。計測すると、口径14.6cm・底径6.0cm・器高4.9cmであり、底径／口径は約0.41である。

壺1(第8図3)

S I 3・埋2層出土である。底部は回転糸切り未調整である。ロクロナデされているが、体部に巻き上げ痕が残っている。頸部から口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は断面三角形を呈する。再酸化を受けており、内面に若干カーボンが付着している。

体部中央径は15.4cmで最大になるほか、口径15.0cm・底径8.0cm・器高13.8cmを計るものである。

壺2(第8図4)

S I 3・埋2層出土のものである。底部は回転糸切り未調整である。ロクロナデされているが、体部に巻き上げ痕を残している。頸部から口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は内側に丸くなるように仕上げられているため、その内面に一条の沈線が形成されている。底面と体部の一部が再酸化を受けて赤変しており、内外面にカーボンが若干付着している。

最大径は15.4cmで体部中央にあるほか、口径15.2cm・底径6.2cm・器高14.2cmである。

甕(第8図5)

S I 1・埋2層出土で、体部から口縁部にかけて、しかもその部位で均位の破片である。非ロクロで、胎土には石英粒を多く含んでいる。全体は輪積みされたと思われ、外面口縁部から内面は横ナデ、外面体部で口縁部上端から7、8cm以下は縦位のヘラケズリがなされている。口縁部上端から約14cm下の体部外面には把手が付けられている。口縁部は体部から若干外反するものである。口縁部に最大径をもつものであり、その径は約23.2cmと推定される。

〔瓦〕

瓦には平瓦、丸瓦片がある。完形もしくは一括品ではなく、ほとんどが接合できない。

平瓦片：凹面に繩目、凸面に布目を有するものであるが、布目がスリ消されている破片が若干混入しているほかは、格子のタタキ目をもつものは見られない。出土遺構はS I 1、S I 3

がほとんどで、S I 2からは若干である。

S I 1出土のものを観察すると、縄目痕の太いものから細いものまで混在し、窯の焼台に使用されたもの、再酸化を受けて赤変したものが多く含まれている。長さがわかるものが1点ある（約38cm・埋1層）。凹面に布目を有し、凸面には細い縄目痕が羽状に残るもので、上・下端が薄く仕上げられているものである。破片の多くは縄目痕は縱方向である。

S I 3出土のものは、布目、縄目の状況はS I 1出土のものと同様であるが、焼台に使用されたと見られるもの、再酸化を受けたと考えられるものは極端に少ない。幅がわかるものが1点あり、約27cmを計る。布目を有し、縄目は細い縱方向のものである。

丸瓦片：凸面はスリ消されているが、若干縄目痕を残すものがほとんどで、凹面には布目痕をそのまま残している。粘土紐巻作りの玉縁付きのものである。

S I 3・埋2層から大きさがわかるものが2点出土している。1点は全長約30.5cm（そのうち玉縁長約8cm）で、もう1点は筒部幅約18cm・玉縁部幅約15cmのものであるが、2点とも、長さ・幅とも、ほぼ同じ位のものと考えられる。



第9図 瓦実測図

[その他]

その他として、羽口片・鉄滓片がある。また遺物の範囲には入れにくいが、炉壁片と考えられるものがある。鉄滓の若干はS I 1の埋1層から出土しているが、他はS I 2・埋1層からの出土である。炉壁片と思われるものを見ると粘土に薬を混入させたもので、砂を意識的に混入していないことから、半地下式の窯跡に使用される「スサ入粘土」とは区別されるものである。

5. まとめ

今回の調査では遺構数及び全体が把握できる遺物数が多くないため、性急な結論を導き出すことはできないが、おおよその年代、発見遺構の性格をまとめたい。

遺構の性格：S I 1～3は竪穴遺構であり、住居跡状の遺構である。前述したように瓦窯跡が南斜面に存在するため、各遺構からは、それに関する瓦片が出土し、特にS I 1からは窯の焼台に使用された瓦片が出土している。S I 2からは羽口片、鉄滓、炉壁片が発見され、鐵治施設と考えられる。S I 3では瓦が立てならべられており、その中に土師器が集中して存在していた。立地場所も斜面上の平場で、丘陵縁辺部に当たる。

以上のことから、3遺構とも窯跡との関連が密接に考えられる。「住居跡状」と表現したもの、一般の竪穴住居跡とは区別するためであり、S I 1～3も作業場としての性格が推定されよう。窯も含めて造瓦所として把えられる。

年代観：年代観を考える前に、まず、S I 1～3の土師器について、出土遺物の項でもふれたように、ほぼ共通した特徴を持つことを確認しておきたい。

共通項を書き出すと、①ロクロを使用している、②环及び小形の甕の底部は回転糸切り・未調整である、③長胴系の甕などは、体部上半から下位の部分がヘラケズリされている、④粘土紐巻き上げ痕が器面に凹凸に残っている、となる。

これらの土師器の年代観は、須恵器等との共伴関係は不明であるが、白鳥良一氏によれば（白鳥：1980）、D群かE群土器に該当すると思われ、9世紀後半から10世紀後半の年代が与えられる。また、須恵器环を中心としたものであるが、岡田茂弘・桑原滋郎両氏の分類によれば（岡田・桑原：1974）、第9類—Dが最も類似するものと思われ、10世紀中から後半にかけてを中心とした年代が与えられている。

瓦から年代観を得るには、研究が進んでいる文様瓦の出土がないため明確にできない。ただ平瓦に模骨痕が見られず一枚造りと思われること、丸瓦が粘土紐巻き造りされている点は、多賀城II期以降の特徴と言える。

以上から年代観をまとめると、10世紀中から後半の年代を与えて、そう間違いない遺物と考えられ、S I 1～3の年代も、そのように理解したい。

参考文献

- 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所・1974
- 木村浩二・青沼一民「神明社窯跡発掘調査報告」仙台市教育委員会・1983
- 白鳥良…「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅳ』宮城県多賀城跡調査研究所・1980
- 進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所・1975
- 結城慎一「仙台市安養寺下窯跡の再検討」「陸奥国古窯跡Ⅳ」古窯跡研究会・1981
- 渡辺泰伸ほか「仙台市折江遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会・古窯跡研究会・1980

写真1 ▶
調査区全景
(西→東)



写真2 ▶
S1 1の状況
(北→南)



写真3 ▶
S1 2の検出
(西→東)



◀写真4
S1 2の断面
(北→南)



◀写真5
S1 2を完掘
(西→東)



◀写真6
S1 3遺物出土状況(1)
(南→北)



写真7 ▶
S1 3遺物出土状況(2)
(東→西)

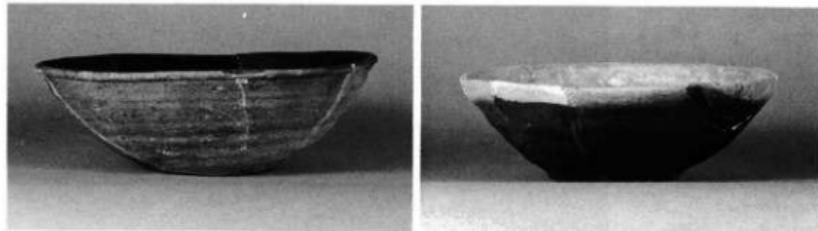


写真8 ▶
S1 3遺物出土状況(3)
(南→北)



写真9 ▶
S1 3を完掘
(東→西)





1

2



3

4

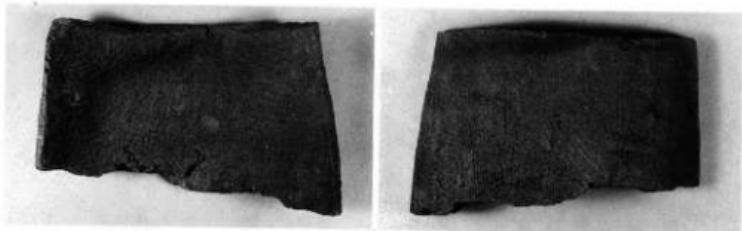


1. 土師器环 第8図-1
2. 土師器环 第8図-2
3. 土師器甕 第8図-3
4. 土師器甕 第8図-4
5. 土師器甕 第8図-5
6. 平瓦 第9図-2
7. 平瓦 第9図-1
8. 丸瓦 第9図-4
9. 丸瓦 第9図-3
10. 羽口 S I-2出土
11. 鉄滓 S I-2出土

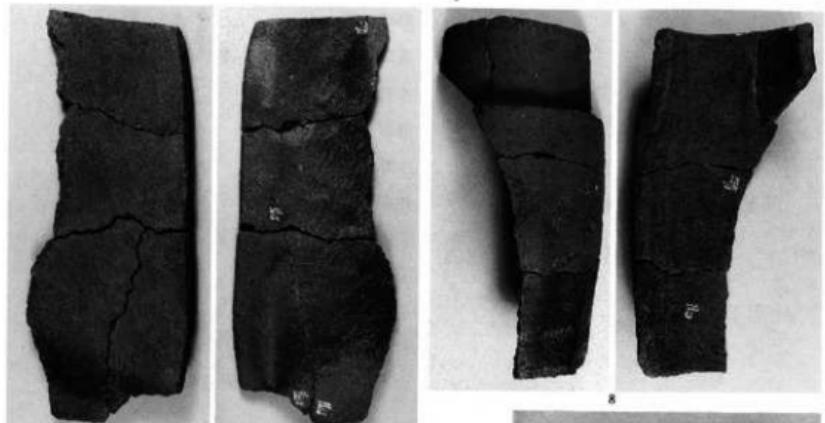
(縮尺不同)

写真10 出土遺物(1)

5

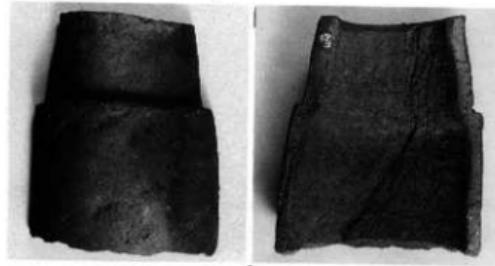


6



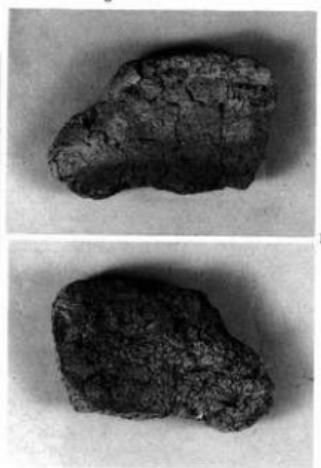
7

8



9

10



11

(縮尺不同)

写真11 出土遺物(2)

職 員 錄

社会教育課

文化財調査係

課長	阿部 達	係長	佐藤 隆	主事	工藤哲司
主幹	早坂春一	主事	結城 慎一	・	渡部弘美
		教諭	菅原 和夫	教諭	渡辺 誠
文化財管理係		主事	木村 浩二	主事	主浜光朗
		・	篠原 信彦	・	斎野裕彦
係長	佐藤政美	教諭	小野寺和幸	・	長島栄一
主事	岩沢克輔	・	佐藤美智雄	・	及川 格
・	山口 宏	主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		・	金森 安孝	・	松本清一
		・	佐藤 甲二	主事	高橋 泰
		・	吉岡 恒平	・	鈴木善弘
				派遣職員	高橋勝也

(昭和61年3月現在)

仙台市文化財調査報告書第92集

五城中学校北窓跡発掘調査報告書

昭和61年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市上杉1-5-1

仙台市教育委員会社会教育課

TEL(代)61-1111

印刷(株)東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166
